

連載 千座の置き戸（ちくらのおきど）

第二百六十六回 文化共産主義 その一

南出喜久治（令和7年4月15日記す）

暴力革命によつてプロレタリアート独裁を行ふ、ハードな「暴力共産主義」を唱へる者は殆ど居なくなつたが、これに代はつて、ソフトな「文化共産主義」が現代社会に猖獗してゐる。

それは、暴力によつて政府組織を破壊するハードな暴力共産主義ではなく、文化工作によつて国民の精神構造を破壊するソフトな共産主義である文化共産主義のことである。

日本共産党も、建前は暴力共産主義を放棄してはゐない。しかし、実質は文化共産主義に方針転換をしてゐるのである。これは世界的傾向なのである。

このことを注視しないと、反共運動は空回りするのである。

グローバリズム、多様性（diversity）、ポリティカル・コレクトネス、ヘイトスピーチ、リベラル、LGBTQ、夫婦別姓など上辺だけ綺麗に飾つた言葉によつてその思想を広めてゐる。

この中でも、ポリティカル・コレクトネス（ポリコレ）といふのは、レーニンが編み出した言葉狩りといふ文化破壊を引き起こす文化共産主義運動である。暴力共産主義は、一度成功すれば、それ以後の暴力は反革命を容認することになるので禁止する。そして、それ以後は文化と民族精神を破壊し続けることによつて革命を完成させる。暴力による政権の破壊が完成すれば、それ以後は旧体制での文化を徹底的に破壊することによつて革命を完成させるといふ二段階の革命なのである。

そして、ソ連と同様に中共で起つたのが「文化」大革命なのである。

レーニンの懷刀だつたコロンタイといふ女性革命家が、婚姻の廃止、家族の廃止、世代隔離をして旧社会の歴史・伝統を次世代に継承させないことが革命の完成だとしたことは、このことを意味してゐる。

そして、現代では、暴力革命がなくても、直接に文化革命が可能な時代となつてきたのである。

元駐ウクライナ大使で、わが国は、敵性国家同士のロシアとウクライナとの紛争に対しでは局外中立を保てとする私の意見を支持してゐる馬渕睦夫も、以前にそんな本を書いてゐたが、この問題は、それ以上にもつと根深い問題がある。

それは、アメリカの状況が極めて深刻な事態になつてゐることである。

アメリカ民主党を率ゐたヒラリーとオバマには、資本主義の牙城であるアメリカを共産主義社会にするために熱心に教へを乞ふた師匠がゐたことを知らなければならないのである。

それは、サウル・アリンスキー(Saul Alinsky)といふユダヤ人共産主義者である。

このアリンスキーとその継承者の思想を丸呑みして、文化と精神の破壊を促進して、個人主義といふ利己主義を蔓延させ人々の政治的無関心を増幅してポピュリズムが通用する政治状況に陥れて、付和雷同を搔き立てて独裁体制を構築し、共産主義社会を実現しやうとしたのである。

アメリカにも共産党があるが、暴力革命路線では殆どの者が支持しない。しかし、民主党を隠れ蓑にすれば、誰からも気付かれないうちに平和時に共産主義政府は実現できる。

オバマケアも、日本の皆保険制度と同様の社会主义政策の一環である。これが実現すれば、人々は医療政策や健康政策において政府の政策に依存する体質となつて政府の言ひなりになる。アメリカの共産主義化の第一歩である。

我が国は、戦前の戦時体制そのものが社会主义政策であり、配給制による貧困層の底上げを歓迎したことから、戦後においてもすんなりと国民皆保険制度は受け入れられたが、アメリカでは、小さな政府を標榜する共和党が国家統制を極度に嫌ふので、実現しなかつただけである。